

「評価手法の研究会」研究協議のまとめ

○早稲田大学教授町田守弘先生からの御指導

- ・生徒も先生も楽しさを共有することが大事。
- ・楽しく、力のつく授業を確認していくことが大切。評価の研究はどのような力がついたかを検証していくことが大事である。
- ・本日の研究授業はそれぞれを全部見たかったが、共通していることは「豊かな言語活動」を目指しているということである。
- ・活力のある「学び」をいかにさせていくかは、どのような効果的な支援を教員がしていくかである。大村はま先生も「手びき」を示している。
- ・本文(教材)にもどることが大事である。
- ・次の学習指導要領については「論点整理」にまとめられている。キーワードはアクティブ・ラーニングである。国語科について言えば、古典や創作活動も話題に上がっている。

○名古屋大学教授柴田好章先生からの御指導

1 子供の「学び」の姿

テキストを読むことは社会的実践である。作品との対話を通して社会とつながる。それは、たとえ一人で読んだとしても言える。教室での「読み」は複数での「読み」であり、より一層社会的実践が広がるものである。

2 メタ認知

「振り返り」をノートに蓄積していくことでメタ認知が働いている。「認知」を認知することがメタ認知である。「振り返り」によって「読む」とはどういうことかを考えることになる。

3年生の俳句の授業で、一文字、二文字が変わることによる表現の違いを考えることで、一文字、二文字を意識するようになる。

3 授業改善

1年生の授業(ピアリーディング)——要点をまとめる作業。ペアによって違うやり方で取り組んでいた。ストラテジーも必要。まずざっと要旨を言ってそこから深めていくなどの方法もある。有効な「学び」の方法を共有させていくことも必要。

※ストラテジー——行為者がある制限された状況の中で自己の目的や関心を最大限に実現していくための戦略。

4 教師が楽しむ

授業のたびに、生徒がどんなことが起こるかを楽しみにしている。

生徒がどんな反応をするかを教師が楽しみにする。

5 学びを大切にする雰囲気

学校の中に「学び」を大切にする雰囲気が感じられる。教室での雰囲気が大事である。ALの授業では、生徒に自己開示を求めている。積極的に自己開示をできない生徒については、裏でのケアが必要である。

6 評価

評価に必要な要素は「信頼性」と「妥当性」。

ミクロに評価をしていくことは、「信頼性」は担保されても、かならずしも「妥当性」につながらないこともある。教育実践としての「妥当性」が必要。生徒に何を学ばせるかが評価につながらなくてはならない。